２０２５年度入学試験問題

小　論　文

（教育学部　養護教諭養成課程　前期）

注　　意

1　問題冊子は１冊（５ページ），解答用紙は４枚，下書き用紙は３枚です。

2　試験中に問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等により解答できない場合は，手を高く挙げて監督者に知らせなさい。

3　すべての解答用紙に，それぞれ２箇所受験番号を記入しなさい。

4　解答は，すべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。

5　試験終了後，問題冊子と下書き用紙は必ず持ち帰りなさい。

問題１　次の文章を読み，設問１，２，３，４に答えてください。

昔，少年がいた。少年は，ある老人から“プレゼント”の話を聞き，少しずつ理解を深めていくことになる――。

老人と少年は一年以上も前に知り合い，いつも仲良くおしゃべりしていた。

ある日，老人は言った。「それはただ“贈り物（プレゼント）”というんだよ。いろんな贈り物のなかで，いちばん大切な贈り物だからなんだ」

「どうしてそんなに大切なの？」①少年は聞いた。

老人は答えた。「この贈り物をもらうと，もっと幸せになれるし，したいと思うことができるようになるからだよ」

「すごい！」少年は声をあげたが，よくはわからなかった。「いつかその“プレゼント”がもらえるといいな。きっと誕生日にもらえるね」

それから，少年は走って遊びに行ってしまった。

老人は笑みをうかべた。

あの子が“プレゼント”の大切さを悟るまでに，何度くらい誕生日を迎えることになるのだろう，と思った。

老人は少年が遊んでいるのを見るのが好きだった。

少年はいつもにこにこしていたし，笑い声をあげて木にぶら下がって遊んでいることも多かった。

少年は喜びにあふれ，やっていることに夢中になっていた。見ていて心楽しいものだった。

少年は成長し，老人は彼が働くようになったのがわかった。

土曜日の朝には，ときおり通りの向こうで少年が芝刈りをしているのを見かけた。

少年は芝を刈りながら口笛を吹いていた。何をしていても楽しそうだった。

ある朝，少年は老人を見て，いつか“プレゼント”の話を聞いたのを思い出した。

少年は，去年の誕生日にもらった自転車や，クリスマスの朝にツリーの下で見つけたプレゼントのような贈り物ならよく知っていた。

だが，少し考えてみて，そういう贈り物はもらったときは嬉しいけれど，やがては飽きてしまうことに気づいた。

彼は思案した。「“プレゼント”はどこが違うんだろう？　どうしてもっと幸せに，もっと物事がうまくやれるようになるんだろう？」

それを聞こうと，彼は通りをわたって老人のところへ行った。

彼はおとぎ話めいた質問をした。「“プレゼント”というのは，願いをなんでもかなえてくれる魔法の杖のようなものなの？」

「いや」老人は笑いながら言った。「“プレゼント”は，魔法や願いごととは関係ないよ」

よくわからないまま，少年は芝刈りの仕事にもどったが，“プレゼント”のことがいつまでも頭を離れなかった。

少年はさらに成長したが，いまも“プレゼント”に思いをめぐらせていた。願いごとに関係がないのなら，どこか別世界へ行くようなことなのだろうか？

どこか外国へ旅することだろうか？　すべてがまるっきり違うところへ。人々も，人が身につけている衣服も，しゃべる言葉も，住まいも，お金までも違うところへ？　どうすればそこへ行けるんだろう？

彼は老人に会いにいった。

「“プレゼント”というのは，どこでも好きなところへ行けるタイムマシンなの？」と聞いてみた。

「違う」と老人。「“プレゼント”を手に入れたなら，もうどこかほかのところへ行くことを夢見たりしなくなるんだ」

年月がすぎ，少年は十代になった。

不満がどんどんつのっていた。大きくなればもっと楽しいことがあると思っていた。なのに，たえずもっともっとと欲しがるようになったのだ――もっとたくさんの友だちが欲しい，もっとたくさんの物が欲しい，もっとワクワクしたい……。

どこかよそに自分を待ちうけているものがあるに違いないと思った。あの老人とかわした会話がよみがえり，ますます“プレゼント”のことを考えるようになった。

もっと幸せになれるという“プレゼント”のことを。

もう一度，老人のところへ行って聞いた。「“プレゼント”は，金持ちにしてくれるもののことですか？」

「ああ，そうもしてくれるだろうね」老人は言った。「“プレゼント”はさまざまな豊かさをもたらしてくれるだろう。しかし，その価値は物や金銭だけでは測ることができないんだ」

少年はわけがわからなかった。

「“プレゼント”を手に入れるともっと幸せになれるとおっしゃいましたよね」

「そのとおり」老人は言った。「それに，したいことは何でももっとうまくやれるようになる。つまり，成功するということだ」

「成功？」

「自分が重要だと思うことがうまくやれるようになるということだ。きみの場合なら，勉強でよい成績をあげる，スポーツが上達する，両親と仲良くなる，放課後のよいアルバイトが見つかる，その仕事で実績をあげて昇格する，などだろう――つまり，人生を楽しみ，自分が置かれている状況に感謝することだ」

「では，成功とは何かは，ぼく自身が決めるわけ？」

「われわれみんながね」老人は言った。「成功とは，われわれみんなが人生のそれぞれの段階で見定めるものなんだ」

「でも，そんな贈り物をくれた人なんかいないよ。人がそんな贈り物の話をするのも聞いたことがないし。そんなものはないんじゃないかという気がしてきましたよ」

老人は答えた。「それが，あるんだよ。ただ，きみはまだよくわかっていないようだ」

きみはすでに
“プレゼント”が何か知っている

すでに　どこへ行けば見つかるか
知っている

そして　なぜ幸せになり

成功できるのか知っている

きみは幼いころには
よく知っていた
ただ忘れているだけだ

老人は尋ねた。「小さいころ，芝刈りをしていたとき，楽しかったかい？　それともつまらなかった？」

「楽しかったよ」少年は子どものころを思い返して答えた。

「どうして楽しかったのかな？」老人は聞いた。

少年はしばらく考えて言った。「自分がやっていることが大好きだったからです。とてもできがよかったので，ほかの人たちからも芝を刈ってほしいと頼まれました。実際，あの年頃の子にしては大金を稼ぎましたよ」

「それで，仕事をしていたとき，何を考えてた？」老人は聞いた。

「芝刈りをしていたときは，芝刈りのことを考えてました。注意しないといけない場所や庭の障害物のまわりをどのように刈ればいいか，考えてた。午後のうちにどれくらい刈ることができるか，どうすればうまく仕上げられるかということも。でも，ほとんどは目の前の芝を刈り取ることに専念してました」

それが当然でしょう，と言わんばかりの口調だった。

老人は身を乗り出して言った。「そうだろうね。だからきみは幸せだったし，成功したんだ」

あいにく，少年はその言葉をよく考えてみようとはせず，ますますじれったくなった。

「本当にぼくが幸せになればいいと思っているなら，“プレゼント”って何なのか，教えてくれませんか？」

「どこへ行けば見つかるかということも？」老人は言った。

「そのとおりです」

「そうしたいのだが」と老人。「私にはそんな力はない。誰もほかの人に“プレゼント”

を見つけてあげることはできないんだ。
“プレゼント”は，きみがきみ自身に与えるものなんだ。それを見つける力をもっているのはきみだけなんだよ」
　少年はがっかりして老人のもとを去った。

出典：スペンサー・ジョンソン著　門田美鈴訳　プレゼント，一部改変

設問 1　下線部①の少年は，この時何歳だと思いますか。それはなぜですか。

設問 2　老人はどうして“プレゼント”が何か，少年にわかるように教えなかったのですか。その理由を述べてください。

設問 3　あなたが少年だとしたら“プレゼント”をどうやって探しますか。その方法と理由を述べてください。

設問 4　少年が「“プレゼント”って何ですか」と聞いてきました。養護教諭としてどう対応しますか。400 字から 600 字以内で述べてください。